

戸塚の商店街とのつながり

～「とつか・モノじまん」と「戸塚区民市」での活動

東海道の宿場街として歴史の古い戸塚は多くの人口を抱え、大学の最寄り駅である JR 戸塚駅の乗降客数は、横浜駅について市内で 2 番目に多い。しかし、住民たちの戸塚駅周辺の商店への利用度は高いとはいえず、駅周辺の求心力に課題がある。

そういったなかで、古くからお店を営んでいる戸塚の商店主が商品の魅力を知ってもらおうとネットワークを作った。「とつか・モノじまん」はその 1 つである。一方、横浜市戸塚図書館が開館 30 周年記念イベントを開催するにあたり、戸塚図書館から大学の地域連携室に依頼があり、ボランティアセンターが協力を行った。図書館では、記念行事の 1 つとして、戸塚の歴史ある産業等について、区民に理解してもらおうという企画を立てた。講演会やフィールドワークのほか、11 月 8 日、9 日には、「とつか・モノじまん」に登録している商店主達が図書館の求めを受けて、ロビーを会場に、商品の紹介や販売を行った。ボラ

ンティアセンターからの呼びかけに応じた学生たちは「とつか・モノじまん」のスタッフの一員として、琴の演奏会場の設営をしたり、地元の農家の人達と一緒に野菜や花を売り協力した。国際協力を行っている学生サークルは、途上国支援を目的としてアジアの雑貨を販売し、地域の人々に支援と協力を呼びかけた。当日集まった学生のなかには、初めてボランティアに参加し



た学生もおり、学生たちにとっては地域の人々と交流する貴重な経験となった。終わった後の反省会では「これまで自分の家の近所を含めて、地域活動に参加した経験がなかった。今回参加して、地域での活動が楽しいことを知った」と語った学生や、「戸塚で一人暮らしをしているが地域の方と話す機会はなく、戸塚っていいところなんですね」と戸塚の魅力を改めて感じる学生など、学生たちが戸塚地域への関心を持つきっかけとなった。当日の世話人の一人である商店主は「再開発の波に飲み込まれそうで、いつ店を閉めようかとみんな毎日悩んでいるですよ。学生の皆さんが明るく一緒に働いてくれて、また頑張ろうと思いました。学生には本当に感謝しています。私たちは人と人のふれ合いのある商店を街から失わせたくなし、再開発で分断されてしまったままでなく、もう一度地域の結束を高めたのです」と、学生たちの協力が商店主を励ますことができたことが分かった。

ここでの出会いが縁となり、ボランティアセンターと戸塚の商店とのつながりが強まった。

月に 1 度戸塚区役所駐車場を会場に開かれる「戸塚区民市」がある。これは、戸塚の良さを地域住民に知ってもらい、再開発で変化を続ける戸塚駅周辺を活気づけようと戸塚区

役所の駐車場を会場に商店主と地域住民が協力して行われているものだ。地元で採れた野菜が出品され、戸塚の老舗和菓子屋や骨董屋さんなど数多くの商店が出展し、子ども向けの縁日も開かれるなど、活気溢れるイベントになっている。

先の「とつか・モノじまん」の活動がきっかけになり、「Action! まずは行動」の方針のもと、ボランティアセンター学生スタッフが「戸塚区民市」に関わることとなった（詳しくは本書「横浜校舎学生スタッフ報告」を参照）。商店街の人たちと共に設営や販売にかかわり、戸塚地域の一員として存在し、行動することを楽しんだ。一緒に働いていた八百屋の奥さんから野菜の料理法を教えてもらい、学生は感激していた。

一方、戸塚図書館の記念行事に参加した学内の国際協力サークルも、区民市に定期的に出店することとなった。こういった活動が定着し、学生たちのブースに毎回訪れてくれる中学生がいたり、途上国支援の為に学生たちが収集している古布や書き損じハガキの提供を申し出てくださるなど、理解と協力関係が生まれている。区民市の隆盛に伴い、学生スタッフは更に明学と地域の連携を強め、盛んにしたいと意欲を持つようになった。最近では、区民市の活気が学生の口コミで広がり、これまで参加していなかった国際協力や環境活動を行うサークルが、区民市への参加を希望するという動きが生まれている。

そうやって、地域の人々が交流を深めている「戸塚区民市」。学生たちが中心となって、区民市にいらした方の交流スペースを作りたい、明学生も企画に携わりたいなど、区民市への意欲は高まっている。

活動の初期段階では、ボランティアセンターのコーディネーターがリーダーシップをとり、学生たちが地域で参加できるような働きかけを行ってきたが、現在では、学生たちの区民市への参加は定着し、学生スタッフは「将来は明学生が中心的な役割を担えるようになって区民市を開催したい」と、意欲をみせている。区民市の将来を考えるミーティングに学生が出席し、商店主や地域の方とともに意見交換を行っている。学生と地域の人々、商店主が協力し合うことで、区民市がさらに発展し、戸塚への愛着が深くなっていくことを願っている。



(糸井)